

前方後円墳・炭鉱の土木遺産と漆喰製造工場の実施調査

特定非営利活動法人 研究機構ジオセーフ会員 石貫國郎

はじめに

2024年(令和6年)がスタートした1月1日、未曾有の能登半島地震が発生した。翌日1月2日には羽田空港で JAL 機と海上保安庁機が衝突した。さらに北九州市小倉北区の鳥町食堂街で火災が発生した。立て続けに大災害に見舞われた2024年の正月の日本、今年はどうのような年になるのか、不安でいっぱいだった。そんな気持ちのまま、2月8日、福岡県桂川町(けいせんまち)の王塚装飾古墳館、飯塚市の炭鉱王、旧伊藤伝衛門邸、田川市の田川産業(株)と石炭歴史博物館の4か所の調査を実施した。

1. 調査概要

福岡県の中央部にある筑豊地域の漆喰製造販売、田川産業(株)の視察を主たる目的として、その他に古代古墳や世界産業遺産を調査した。これらは古墳時代から大和朝廷へ、明治維新から世界へ羽ばたいた産業革命、日本が誇る土木材料の発展に寄与してきた漆喰、どれもが日本の未来を明るく照らしてきた歴史を見て、聞いて先人の生きる力を感じた調査となった。この日は晴れの良い一日となった。

調査実施日 2024年2月8日(木)

実施時間 8時00分 博多駅・出発 ~ 17時30分 博多駅・解散

調査参加者 5名

調査箇所 ①出発 福岡市 →②桂川町 →③飯塚市 →④田川市 →解散 福岡市



図-1 博多駅から見た調査地点の位置

2. 王塚装飾古墳の調査

王塚装飾古墳は、六世紀前半に造られたと考えられる日本有数の装飾古墳である。また墳形は前方後円墳である。壁画保存のため春(4月)と秋(10月)の年に2回のみ公開を行っている。

私たちが訪問した「王塚装飾古墳館」では、石室に色彩豊かな文様が描かれた壁面や石室内部に石屋形や灯明台、石枕などのレプリカが展示されており、実際の墳墓に入ることはできないが、十分に装飾古墳を堪能することができた。パンフレットに「古代人たちが来世に託した祈りと願いを、今に生きる私たちへのメッセージとして受け止め、悠久のロマンを体験して頂きたい」と書かれていたのが印象的で、とても素敵で感動した。

さて、巨大古墳は大きな権力をもった豪族が優れた土木技術をもつて造った建造物と考えられている。大林組(スーパーゼネコン)が「王塚」(季刊大林 NO.20, 1985 発行)で、仁徳天皇が埋葬されているといわれている大山古墳(大阪府)墳丘の長さ約 480m、高さ約 30m を例に現代と古代の建設工法を比較、試算したレポートを見つけた。1985 年に試算したデータによると、古代工法で行なった場合、工期は 15 年 8 か月、作業員数は延べ 680 万 7000 人、総工費は約 796 億円、現代工法で行なった場合、工期は 2 年 6 か月、作業員数は延べ 2 万 9000 人、総工費は 20 億円となっている。古代人たちは気の遠くなるような時間と労力をかけ、豪族の墳墓を建造したことが分かる。

今回訪問した王塚装飾古墳(墳丘は全長約86m、高さ約9.5m)の建設が気になった。工期、作業員、総工費はどれくらいかかったのだろう。古墳建設中に立ち会うことができれば・・・と残念に思った。古代から現代へ、建設技術の進化が失敗を繰り返しながらさらに経験と実施を積み重ねた技術者の努力によって継承されてきたのだろう、とても技術者の一人として誇らしく感じた。

しかし、こうした技術はどこから、だれから伝えられたのだろう、興味がつきない王塚装飾古墳の調査であった



写真-1 王塚装飾古墳館に掲載されているパネル(1)

邸宅入口の長屋門の大きさに驚いた。さらに屋敷全体の部屋数の多さにも驚かされた。表玄関から順路に沿って屋敷内を見て回ったが、家人、使用人等合わせて何人で暮らしていたのだろうか、当時の屋敷内での慌ただしくも賑やかな様子が感じられるような錯覚に陥った。

調査日の2024年2月8日は「旧伊藤伝右衛門邸内に数多くのひな人形が所狭しに飾りつけられ訪れた人を楽しませていた。(写真参照)ひな人形や調度品等が置いてある畳敷の部屋を一つ一つゆっくり鑑賞していったが段々、足がじんじんするくらい痛く、寒かった。家人はこの寒さに耐えていたのだろうか。暖炉のある応接間らしき部屋は暖かっただろう……。

伊藤伝衛門が再婚した妻(歌人柳原白蓮)が生活するために増築した2階座敷があった、その部屋からは美しい日本庭園が眺められた。(写真参照)大正天皇の従妹にあたる妻に対する伝衛門の気遣いの大きさを感じた。



写真－3 邸宅入口の長屋門



写真－4 白蓮のために増設された家屋



写真－5 邸宅からの庭の眺め



写真－6 開催されていたひな祭り

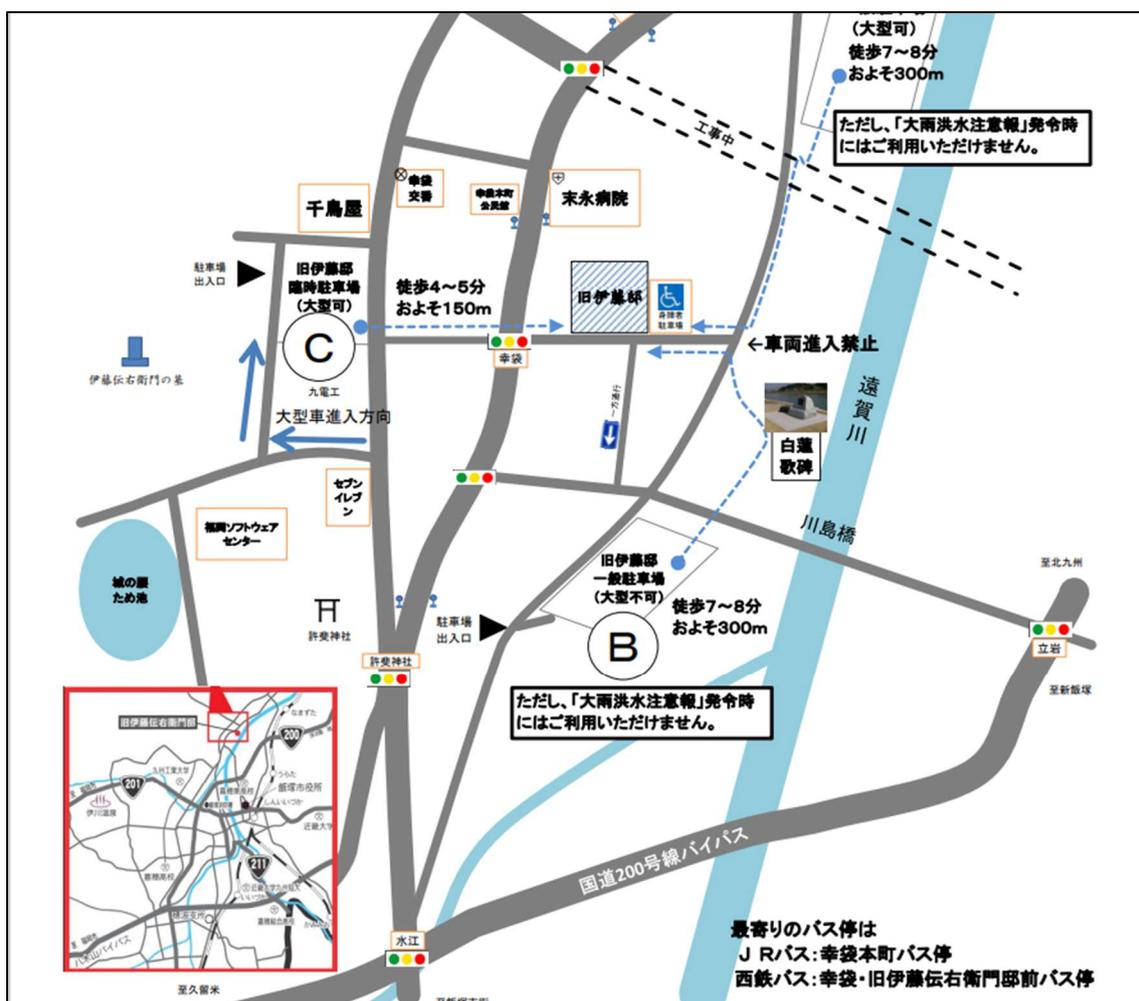


図-3 旧伊藤伝衛門邸の位置図 飯塚市 HP より

4. 田川産業(株)訪問

田川市にある漆喰等の製品開発及び製造、販売している田川産業(株)を訪問した。当社代表取締役である行平信義社長に意見交換と工場案内までお忙しい中であつたにも関わらず、快く対応して頂いた。田川産業(株)は大正13年(1924年)創業で原料石の窯から最終製品に至るまでの一貫した製造設備を持ち、日本が唯一自給可能な石灰資源の応用と漆喰の技術開発をコアテクノロジーとして革新的な製品を100年もの間、造り続けてきた。

研究機構ジオセーフでは、これまでも長崎県の軍艦島や熊本県の通潤橋で接着剤のような使用した漆喰を現地調査してきた。その継続調査の一環として「現代の漆喰産業」を調査するために訪問したものである。

田川産業では、高品質な福岡県産の石灰石を原料に製造した消石灰を原料として使用している。漆喰づくりは消石灰に海藻糊とスサ(麻の繊維)を加えて製造していると聞いた。塗り壁の美しさと強度をもつた壁に仕上げる、とのことであつた。日本の伝統のすごさを知ることができた。

また驚くべき話を聞いた。漆喰の持つ6つの力があるという。消臭性、調湿性、抗菌性、安全性、不

燃性、防カビ性。このうち、抗菌性では、新型コロナ(COVID-19)同系統ウイルスに対する抗菌作用を有することが実証されたという。今後、環境ものづくりとして種々の建築物への利用が促進されれば安全・安心の住まいが提供できるようになるのではないかと、思われた。

漆喰から生まれた新素材、焼かないセラミック。CO2 削減にも寄与する製品開発であり、田川産業(株)だけのオリジナル製品である。これからも意欲的なチャレンジ精神をもった行平社長からどんな製品が生まれて来るか、注目していきたい。



写真－7 工場内見学の様子

※写真、右から2番目が説明して頂いた行平社長



写真－8 研究室内での説明と質疑応答

左から2人目が行平社長



図－4 田川産業株式会社の位置図

5. 田川市石炭・歴史博物館の調査

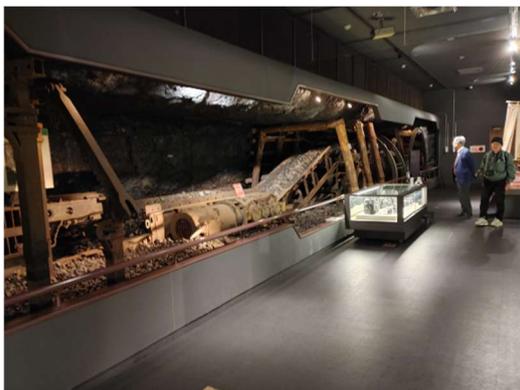
田川市石炭・歴史博物館は、三井田川鉱業所伊田堅坑の跡地に所在し、昭和 58(1983)年に「田川市石炭資料館」として開館した。平成 17(2005)年、「田川市石炭・歴史博物館」と改称した。博物館には約 1 万 5 千点が石炭関連資料があり、そのほかに日本最古級の馬形埴輪や甲冑形埴

輪、セソドノ古墳から出土した多種多様な古墳時代の武器・武具・馬具など全国的に著名な考古・歴史資料も収蔵・展示している。

訪問日は、平成 23 年、日本で初めてユネスコ世界記憶遺産に登録された「山本作兵衛コレクション」が展示されていた。山本作兵衛は自身が炭鉱夫として働いた。彼が描いた炭坑内の作業描写に解説を加えているため、「炭鉱記録画」として現在に残されてきた。五木寛之氏の「青春の門」の記憶が呼び戻った。

館内には、坑道や採掘のために必要な測量機械や掘削機の展示があった。大規模な土木事業が行われており、落盤等の危険を回避するための対策もしていたと説明がされていた。特に「安全」には気を使っていたようで、その対策は現代にも通じるように感じられた。

さて、炭坑節発祥の地はどこだろう。大牟田市の三池炭鉱と思っていた。今回の博物館調査で発祥の地は田川市三井田川炭鉱であることがわかった。当館の近くにお月さんを煙たがらせた煙突が田川の二本煙突(写真参照)が残されている。



写真－ 9 採炭坑道の復元



写真－ 1 0 当時の三井田川炭鉱のモデル



写真－ 1 1 採炭機械類の屋外展示



写真－ 1 2 竖坑槽

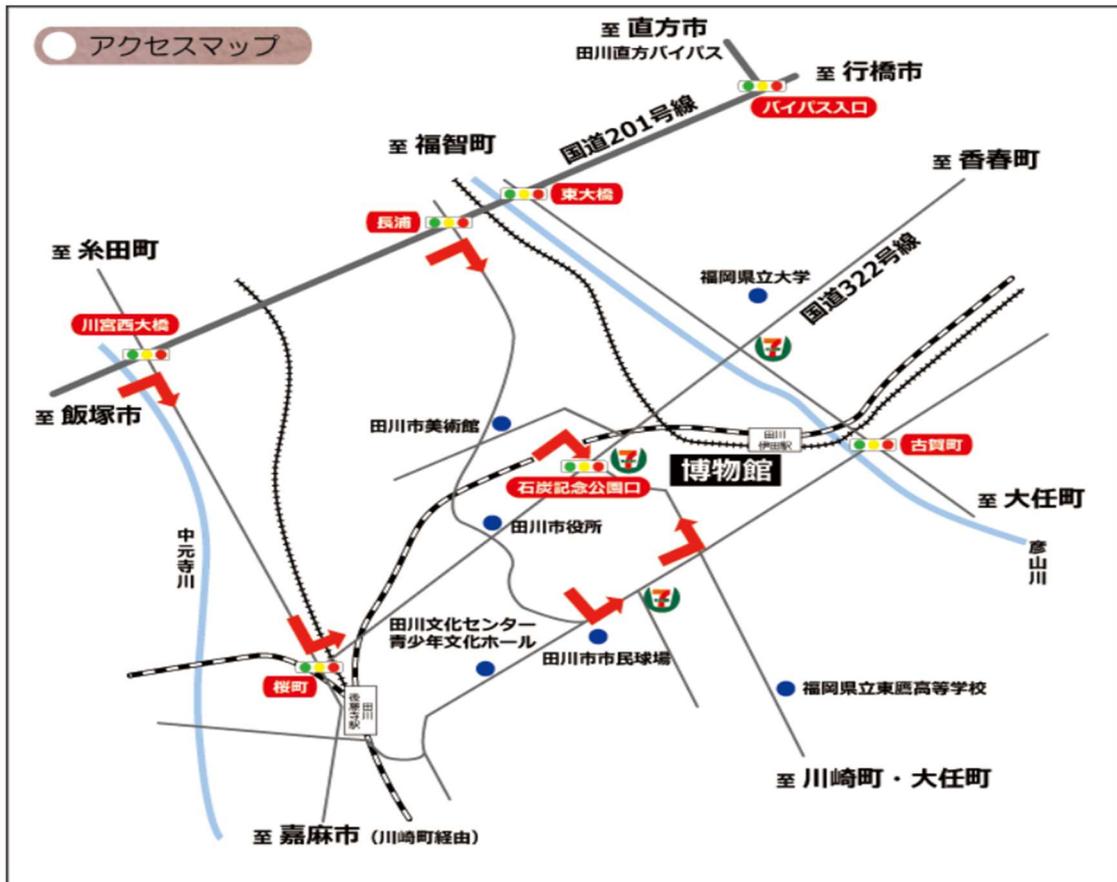


図-4 田川市石炭・歴史博物館の位置図 案内パンフレットより

6. その他

今回の調査で気になった地名について調べてみた。

大塚装飾古墳がある嘉穂郡桂川町寿命(じゅめい)という地域名がある。その由来は見つけられなかった。

一方、北九州市八幡西区楠橋に寿命(じめ)という地名があることが分かった。同じ漢字であるが、読み方は「じゅめい」と「じめ」である。関連はあるのだろうか。

飯塚(いづか)市は、嘉麻川と穂波川が合流して遠賀川となる交通の要地に位置し、近世には遠賀川水運の舟場、長崎街道の宿場町として栄えた。

古代から昭和まで川は舟運の場として利用されていた。この交通の手段となった川が地名に何らの関係があるのだろうか、昔からの地名には伝承の意味合いがあったのかもしれない。